

ちよつとしい話

～ お彼岸 ～

20年8月6日

9月は「お彼岸」の施餓鬼法要がございます。お彼岸は「此の娑婆（この世）の事を此土しどと言うのに対して彼の土かど、極楽世界」の事を指しています。家康公がスローガン（slogan）とした厭離穢土おんりえど、欣求浄土ごんぐじょうどの穢土が「この世」であり、浄土が「極楽世界」であります。佛の世界は小の国 1000、中の国 1000、大の国 1000 の 3 千大千世界で構成されています。そして我々が住む此の世界は宇宙の中心にある須弥山より南に位置する南閻浮堤なんえんぶだいにあります。ですから神佛に向かって自己紹介する時には南閻浮洲ぶしゅうと言います。洲とは「島国」という意味です。

お彼岸法要は春と秋の二回行われます。春分、秋分それぞれ春季、秋季とも一週間の真ん中にあり、昼夜等分の日になります。お釈迦様の十大弟子の中に神通力に最も優れた目連尊者もくれんそんじゃ（目犍連もっけんれん）と言う方がみえました。或る時、神通力を以って亡き母親の生活を見て驚きました。その驚愕きょうがくの状態は地獄で悶え苦しんでいる母親の姿でした。三悪道まのあ（地獄・餓鬼・畜生）に落ちて苦しむ母の姿を目の当たり見て、目連尊者は釈尊に母親を救い出す手立てはないものか問診されたのです。お釈迦様曰く目連よ「施餓鬼さと」をなさいと諭されました。それは僧侶に対して飯食を提供する布施行をする事でした。その功德よに因って救われるとの教示きょうじを頂き、実行して母親を地獄の苦しみから救いだしたのです。この事実から施餓鬼供養が厳修されています。布施行の一貫として釈尊を始め弟子たちは托鉢かどづけをしながら各家々を門付しました。私達は三悪道に落ちないためには常日頃から五行「欺あざむく事、怠なまける事、瞋じん（怒る事）、恨うらむ事、怨おん（相手に不幸・災難等の仕返しを伴う憎しみを抱く事）」をせず、十善戒を守り、善知識者として生活していくべきです。そうした生活をした人は、善導大師曰く「低頭禮佛在此国願往生いわ 挙頭已入ていずうらいぶつざいしこくがんおうじょう 弥陀界無量楽こずういにゆうみだかいむりょうらく」とおっしゃってみえます。即ち、頭を下げて往生を願えば、頭を上げた時には既に極楽に生まれていると言う事です。一般の方には目にも見えず、耳にも聞こえず、匂いも無く、忍び寄る先祖の魂、追善の供養をするも、しないも残された子孫しだいでしょう。親に不幸は親に成る資格無し、即ち、不親となり、不親切と成ってしまい、切りたくなくても切り捨てられる事になります。彼岸が来たら先祖を含め今一度家族について佛を中心に考えて見ても良いでしょう。悶悶もんもん（悩み苦しむ）